

生命保険文化センター賞

かけがえのない家族

岡山県 岡山大学教育学部附属中学校 一学年

岡本 高煌

電話口から父の声が聞こえた。

「俺は無事だから。」

その時、父の声を聞いて、家族全員がどれほどホッとしたかわからない。

僕の父は医者だ。七月七日、西日本豪雨で倉敷市真備町が茶色の海と化したあの日、父は、朝早く診察のため、車で出掛けていった。そして、深夜を過ぎても帰って来なかった。川が氾濫し、避難拠点となった、まび記念病院に患者さんや避難してきた住民の方々と閉じ込められたのだ。SNSで送られてきた写真に写っていた父の車は、屋根の上まで完全に水没していた。病院の駐車場に着いてから、あつという間に水位が上がったという。

「通勤途中に車の中で閉じ込められなくて本当に良かった。もし、閉じ込められていたら。」

と、母が言った。水没した車内では外からの水圧によって、ドアを開けることさえ出来ず、逃げ遅れ死亡してしまうケースもあるという。もし、父が死んでいたらと思うと僕はゾツとした。

今回の西日本豪雨の災害で、真備町だけではなく日本各地で多くの方が亡くなられた。身近な人の「死」に触れたことのない僕にとって、今回の事は「家族の死」について考え、「家族の大切さ」を改めて再確認させてくれるきっかけとなった。

僕は、父の言葉を思い出した。

「お前達が一人前の社会人になるまで、あと十年は死ねないな。父さんもまだまだ頑張らないとな。でも、俺にもしもの事があつたら、掛けてある保険のお金で大学に行って、しっかりと勉強しなさい。」

父は僕たち姉弟のために、もし自分に万が一の事があつた時、子供達が進学してそれぞれの夢を叶えられる様に、保険を掛けてくれていた。

勿論、何よりも尊いのは「家族の命」だ。お金や物には代えられないかけがえのないものだ。父が健康で、生きてくれる事が何よりも僕の願いだ。でも、当たりの毎日が病気や交通事故や災害で、一瞬で変わってしまうことがある。それは悲しい事だがゼロとは言いつれないのだ。残された家族の生活は一転してしまう。そのリスクへの備えをするために、保険はあるのだ。そして、保険の仕組みとして大切なのは、「相互扶助の精神」だ。個人では、自分や家族のために加入している保険だが、全体で見れば困っている知らない誰かのためにみんながお金

第56回中学生作文コンクール

を出し合って、一人ひとりが支えあい助けているのだ。父が僕達家族を思うように、保険に入っている一人ひとりの家族への愛のかたちが集まって、保険は成り立っている。そう考えると胸が熱くなった。

父は今、仕事場に電車で通っている。朝、「いってらっしゃい。」、夜、「おかえりなさい。」と当たり前前に父に言えるこの光景が何よりも今は、愛おしく思う。